



Title	近世琉球の外交と仏教僧：古琉球からの変化に着目して
Author(s)	源, 清香
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2025, 11, p. 5-8
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102710
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近世琉球の外交と仏教僧

ー古琉球からの変化に着目してー

現代日本学 博士後期課程 1 年

源 清香

1. 本発表の課題ー先行研究を踏まえてー

琉球・日本の外交関係においては、古琉球(12世紀頃～1609年)以来、仏教僧が使僧として派遣されてきた。しかし、使僧が果たした役割は時代とともに大きく変化する。琉球において、仏教は国制上の位置づけを与えられ、鎮護国家や王権の権威化等を担っていた。古琉球期には、国王の帰依・信任を得る僧侶や、外交担当者として琉日間交渉にあたり政治的影響力を発揮する僧侶もいたが、薩摩藩の附庸となった近世琉球(1609年～1879年)の時代になると、王府の宗教政策の結果、その役割は先王祭祀・供養や護国・加持祈祷に収斂するとされる¹。しかし、古琉球期の琉日間相互派遣と比べると限定的ではあるが、近世琉球においても、王府は依然として薩摩へ使僧を派遣していた。

ここで先行研究を一瞥しておく、琉日間の使僧に関する主な先行研究には、まず中世日本の対外関係史の諸研究があり、琉球と五山ネットワーク²や大徳寺派³との関わり等を指摘している。このほか、古琉球の対日交渉における禅僧の具体的活動⁴や、対日交易への仏教の経済的貢献⁵等を明らかにした仏教史研究がある。このように、古琉球と中世日本間の外交・交易と禅僧に関する研究が進展する一方で、古琉球から近世琉球を通じた検討や、近世琉球の仏教と外交のかかわりに関する論及はほとんどみられない。

そこで、本発表では、まず使僧の役割について古琉球から近世琉球を通して概観し、近世琉球には仏教の外交機能が縮小していくことを指摘する。そのうえで、近世の琉薩外交における使僧の活動を具体的に解明し、機能が縮小したとはいえ、近世琉球において仏教僧が外交上果たした一定の役割について確認したい。この2点を提起することが、本発表の課題である。

2. 古琉球から近世琉球にかけての使僧

本節では、古琉球から近世琉球にかけて、琉薩の使僧の役割はどう変化したかを、【表1】に即して見てみよう。【表1】は、古琉球から近世琉球にいたる琉薩間の使僧の事

¹ 以上、琉球仏教史の概要は知名定寛『琉球仏教史の研究』(榕樹書林、2008年)参照。

² 村井章介『東アジア往還 漢詩と外交』(朝日新聞社、1995年)。

³ 伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』(吉川弘文館、2002年)。このほか、先駆的研究に、小葉田淳『中世南島通交貿易史の研究』(日本評論社、1939年)がある。

⁴ 葉貫磨哉「琉球の仏教」(中村元、笠原一男、金岡秀友編『アジア仏教史 中国編IV 東アジア諸地域の仏教』佼成出版社、1976年)。

⁵ 前注1。

例を、現時点で確認できている範囲で、網羅的に一覧化したものである。ここからわかることを、古琉球と近世琉球について、それぞれ整理してみたい。

まず、古琉球においては、琉球は善隣関係を前提とした通交等を目的に使僧を派遣していた。紋船とは、琉球が儀礼修好として派遣した、多分に政治的性格を内在する官船のことで、島津氏の世主継立等の祝詞を奏達していた⁶。一方、島津氏の派遣目的は折衝や通交であり、琉球の使僧もまた、薩摩で外交案件に対応したり、外交文書を託されることがあった。しかし、16 世紀後半になると、徐々に琉薩関係が緊迫化⁷していき、琉球の使僧の役目も緊張感を有するものとなっていく⁸。そして、薩摩からの最後通告ともいえる大慈寺龍雲長老派遣の翌 1609 年、琉球は薩摩の侵攻を受け、その附庸下に入ることとなる。なお、侵攻の和睦交渉には、琉薩の禅僧があたっている。

【表 1】古琉球から近世琉球にかけての琉薩間の使僧

時期	国王	琉球（使僧/使者）	島津氏（使僧/使者）	使僧派遣目的
嘉靖年間	尚清	天界寺月泉長老/世名城主良仲		通交。紋船使。
1556年	尚元	建善寺月泉和尚		通交。
1559年	尚元	天界寺叔和尚/世名城大屋子		通交。
1569年	尚元	天竜寺長老		漂流船送還の謝礼。※ 1
1570年	尚元		広済寺雪岑長老	折衝。通交。
1572年	尚元		広済寺雪岑長老	折衝。
1575年	尚永	天界寺南叔和尚/金武大屋子		通交。紋船使。
1578年	尚永	天界寺修翁和尚		通交。紋船使。
1578年	尚永	妙巖寺		通交。
1581年	尚永	普門寺和尚		通交。紋船使。
1585年	尚永	天王寺祖庭和尚		通交。
1589年	尚永		大慈寺和尚	折衝。
1589年	尚永	天龍寺桃庵/安多尼屋		通交。紋船使。
1592年	尚寧	建善寺大亀和尚/茂留味里大屋子		通交。紋船使。
1593年	尚寧		真言宗光明院及瑜弟子成就院性隆法印	折衝。
1593年	尚寧	天王寺菊隠長老/金氏摩文仁親方安恒		通交。紋船使。
1598年	尚寧	護国寺快雄座主/大里大屋子		通交。紋船使。
1603年	尚寧	報恩寺		
1603年	尚寧	安国寺		家久への祝儀遅延説明。
1606年※2	尚寧	崇元寺/宜謨里主		通交。
1608年	尚寧	自徳/宜保親雲上		
1608年※3	尚寧		大慈寺龍雲長老/市来織部正・村尾笑栖	折衝。
1609年	尚寧	西来院菊隠宗意/具志頭王子朝盛・名護良豊・池城安頼・喜安等	大慈寺龍雲長老/市来織部正・村尾笑栖	和睦交渉。
1628年	尚豊	波上山頼翁法印/向氏玉城親方朝智		折衝。
1631年	尚豊		昌林寺和尚	浦添王子尚恭の弔祭。
1638年	尚豊	円覚寺復岩長老/向氏勝連按司朝盈・麻氏与儀里之子親雲上盛庸		家久の弔祭。
1695年	尚貞	円覚寺蘭田長老/向氏伊江按司朝嘉・向氏屋嘉比親雲上朝楷		光久の弔祭。
1705年	尚貞	円覚寺徳叟長老/向氏浦添按司朝卓・向氏富名腰親雲上朝興		綱貴の弔祭。
1748年	尚敬	円覚寺古徹長老/向氏玉川按司朝計		吉貴の弔祭。
1750年	尚敬	円覚寺古徹長老/向氏美里按司朝昌・毛氏大城親雲上盛倅		宗信の弔祭。
1756年	尚穆	円覚寺羅山長老/向氏豊見城按司朝儀		重年の弔祭。
1761年	尚穆	円覚寺住持湛玄長老/馬氏国頭按司正方・向氏伊良波親雲上朝利		繼豊の弔祭。
1773年	尚穆	円覚寺大翁長老/毛氏亀川親雲上盛喜・向氏本部按司朝救		浄岸院(繼豊の室)の弔祭。
1833年	尚灝	円覚寺白翁長老/向氏手登根親雲上朝用・向氏金武按司朝英		重豪の弔祭。
1842年	尚青	円覚寺竺胤長老/馬氏国頭按司正秀		斉宣の弔祭。
1859年	尚泰	円覚寺單傳長老/向氏本部按司朝章・向氏喜友名親雲上朝長		斉彬の弔祭。
1860年	尚泰	円覚寺玉僊長老/向氏大村按司朝憲・馬氏辺土名親雲上正蕃		斉興の弔祭。

（『中山世譜』附卷（伊波普猷、東恩納寛惇、横山重編『琉球史料叢書 5』（鳳文書館、1988 年）所収）、「大和江御使者記 一冊 二〇ノ二」（尚家文書 310 号、那覇市歴史博物館所蔵）、『喜安日記』（森威史『校註 尚家本 『喜安日記』』（榕樹書林、2023 年））、『旧記雑録 後編』（『鹿児島県史料 旧記雑録後編』1-6（鹿児島県、1981～1986 年）所収）を参考に作成。）※ 1 知名(2008)参照。※ 2 喜舎場(1993)参照。※ 3 知名(2008)参照。

⁶ 喜舎場一隆『近世薩琉関係史の研究』（国書刊行会、1993 年）。

⁷ 1575 年の紋船使は、島津氏使僧への薄待や印判不帯船許用等を詰問されている。この「あや船一件」が琉球侵攻の端緒的・決定的要因のひとつとされる（前注 6 喜舎場論文）。

⁸ 前注 1。

次に、近世琉球について見てみると、琉球の使僧は、「一紙目録」（薩摩藩交付の知行目録⁹）再交付を請求する 1628 年の移行期の事例を例外として、弔祭が派遣目的であったことがわかる。弔祭対象は基本的に薩摩藩歴代藩主であった。一方、1631 年には、薩摩藩からも王族死去時に弔祭の使僧が派遣されている。

以上、琉薩間の使僧派遣目的を古琉球から近世琉球を通してみてきた。古琉球において、使僧は、琉薩外交の最前線で通交や折衝を担ってきた。一方、近世琉球になると、使僧の派遣目的は薩摩藩主死去時の弔祭が主となっていく。このように、古琉球と比較すると、近世琉球では仏教僧の外交的役割が縮小していったことがわかる。

3. 近世琉球における使僧の役割

それでは、近世琉球の使僧の具体的な役割を、1842 年の円覚寺住持竺胤長老を事例にみていく。使用史料は「天保十二年 円覚寺住持上国日記」（尚家文書 309 号、那覇市歴史博物館蔵）で、国王使の一連の動向を整理すると次のようになる。

まず、薩摩藩主島津斉宣（大慈院）が 1841 年 10 月に死去すると、翌年 6 月に王府は「御香奠使者」の国頭按司と「御吊之御使僧」の竺胤長老、役僧の円覚寺法堂道順長老らを薩摩へ派遣した。使節一行は、鹿児島城での「御書翰上」や「御目見」などを済ませ、8 月に、薩摩藩主の菩提寺福昌寺にて「御祭文献納」と「御香奠献納」が行われた。儀式次第は次の通りである。

まず、国王からの献納物（法華写経・官香・御香奠銀）を御牌前に供え、使者の国頭按司が拝礼する。続いて、導師の竺胤長老と御祭文僧の道順長老が御牌前に進み、竺胤長老が焼香・拝礼し、参列の琉球人一同拝礼。そして、御霊膳を御供台に供え、竺胤長老が焼香・拝礼、按司も拝礼すると、竺胤長老が御祭文を按司へ渡し、按司は頂いてから御祭文僧の道順長老に渡して、御祭文が読まれる。その間に、按司は頓首し、読み終わると按司は一礼して座に戻り、回向が勤められた。その後、按司・竺胤長老・道順長老・その他の順で各々の献納物を供えている。

この 2 日後、「福昌寺・浄光明寺御佛指」があり、使節一行は福昌寺と浄光明寺で、歴代藩主の御位牌殿等へ参拝し、この後、10 月に帰国している。そして、翌年 4 月に首里城で「御返翰御披之御規式」が行われ、使僧としての勤めを完了させた。

以上のように、使者・使僧の職務は、薩摩藩主の死に対する国王からの弔意を示すことであった。福昌寺における御祭文・御香奠献納儀礼では、使者国頭按司が使節を代表して国王の献納物を供え、竺胤長老が導師を、道順長老が御祭文僧を務めた。つまり、使僧の役割は、琉薩の外交関係上で行われる祭文儀礼を仏教僧として執行することであった。このように、近世琉球において、仏教僧は、仏教的要素を有する外交場面においては一定の役割を求められ、使僧の派遣は限定的ながらも近世琉球を通して続いていたのである。

⁹ 喜舎場一隆「南島初期人頭税の周辺 1」（『琉球大学法文学部紀要』17 号、1974 年）。

4. 使僧の役割の変化とその要因

以上、古琉球から近世琉球にかけての琉薩間の使僧を概観し、その性格の変化を捉えたうえで、近世琉球の使僧の具体的な役割を明らかにした。

古琉球において、使僧は、通交の紋船使を務めたり、正使として政治外交上の折衝・調整にあたるなど、琉薩外交の最前線を担っていた。一方、薩摩の附庸となった近世琉球の使僧派遣は、近世初期の事例を例外として、それ以後は薩摩藩主等弔祭が目的となる。弔祭を担う使僧の役割は、仏教僧としての祭文儀礼執行であった。このように、古琉球の使僧とは異なり、近世琉球の使僧は、琉薩間の政治・外交折衝の場に携わることはなく、仏教僧としての儀礼執行を果たすのみとなっていく。このような変化の要因として、次の2点が考えられる。

まず一つ目は、17・18世紀の王府の仏教政策である。官寺の設定や、王府の位階制度内での僧侶身分の規定など一連の改革の結果、仏教界は王府の政治機構に組み込まれ、政治的影響力を遮断されたと指摘されている¹⁰。

そして二つ目は、近世日本における禅僧の外交上の役割の低下である。徳川政権では、近世的な外交秩序が整備され、以心崇伝(家康・秀忠の政治顧問)が1633年に死去すると、禅僧が外交に携わる場面が急速に縮小する¹¹。近世琉球の場合も、外交折衝を担う使僧の派遣がみられるのは、17世紀前半までである。琉球は、対中国・東南アジア諸国には、華人ネットワークと久米村の人材を、対日本には禅宗ネットワークと仏教僧を活用してきた。このように通交相手のネットワークや人材を内面化して外交手段とすることが琉球外交の特質とすれば、近世日本において禅僧が外交を担う時代が終焉したとき、琉球にとっても外交面における仏教僧起用の必要性が低下したのではないかと考えられるのである。

5. おわりに

以上、古琉球から近世琉球にかけての使僧の性格の変化および近世琉球の弔祭僧の具体的な役割についてみてきた。本発表の結論としては、次の2点が指摘できる。①まず、使僧の性格の変化から、仏教の外交機能は近世琉球になると縮小していくことである。とはいえ、②近世琉球においても、仏教が外交の場から完全に切り離されることはなかった。第3節でみた祭文儀礼のように仏教的要素を有する儀礼の執行や、薩摩への御守護札送付¹²等といったように、対外関係において仏教の宗教的機能が有効である場合には、王府は依然として仏教僧を外交に関与させていた。この意味では、近世琉球においても依然として仏教僧は外交上一定の役割を果たしていたと指摘できよう。

¹⁰ 前注1。

¹¹ 伊藤幸司「外交と禅僧―東アジア通行圏における禅僧の役割―」(『中国:社会と文化』24号、2009年)。

¹² 大城直也「明治維新政府の樹立と琉球王国の反応―尚家文書を中心に―」(『明日へ翔ぶ―人文社会学の新視点―6』風間書房、2023年)。